

大学生内野守備の試合場面におけるゴロ処理の動作パターン ノック練習との比較

小野寺 和也¹⁾ 森本 吉謙¹⁾ 入澤 裕樹¹⁾ 坪井 俊樹¹⁾ 小野寺 恵介²⁾

Kazuya Onodera¹, Yoshikata Morimoto¹, Yuki Irisawa¹, Toshiki Tsuboi¹ and Keisuke Onodera²: A study of college baseball infielder's movement pattern in game compared with fungo

和文抄録：

本研究は、大学野球遊撃手の試合場面におけるゴロ処理の動作パターンについて、先行研究で示されたノック練習における動作パターンとの違いを明らかにすることで、実践現場および今後のゴロ処理の動作パターンに関する研究のための一資料を得ることを目的とした。67試合の169のショートゴロ処理の動作パターンについて2名の指導者が映像観察を行い、5つのカテゴリーを作成しラベリングを行った。さらに、その結果と金堀ほか(2015)の報告にあるノック練習について、 χ^2 検定(独立性検定)を用いて比較し、有意差がみられた場合には残差分析を行った。その結果、【打球方向】と【スローイング】について有意な差はみられず、試合において【捕球バウンド】は『ショートバウンド』と『ハーフバウンド』が多く、『ロングバウンド』が少なかった。【ハンドリング】は『シングルハンド』と『逆シングル』が多く、『ダブルハンド』が少なかった。【ステップ】は、『複数ステップ』『ランニングスロー』『ノーステップ』が多く、『ワンステップ』が少なかった。

Key words: baseball, defense, infielder, catching, throwing

キーワード: 野球, 守備, 内野手, 捕球, 送球

1. 緒言

野球の内野守備においてゴロの打球を捕球し、一塁に送球しアウトをとるというゴロ処理の技能は、重要な能力である。内野手は、打者がバットでボールをインパクトしてから、一塁へ到達するまでの時間的な制約の中で、様々な打球に対応しながら、ゴロ処理を行わなければならない。打球を正確に捕球し、捕球後に素早く送球に移るための基本動作として、両足を広げ、左足を少し前に出して捕球すること(二宮・近藤, 2000)や、腰を落としてボールに正対して捕球する(谷沢, 2000)という指導が一般的に行われているが、試合場面

では様々な打球や状況に応じて、動作パターンを変化させながらゴロ処理を行っている。打者をアウトにするという目的のためには、ボールを少しでも早く一塁に到達させることが重要であるため、打球や打者走者の走力に応じた対応が必要であるといえる。例えば、左右に追いつけるかどうかという打球についてはシングルハンドで捕球を行ったり、緩い打球に対して全力で近づき片手で捕球後にランニングスローで送球したりする動作パターンも試合場面で見られる。金堀ほか(2015)は、大学生遊撃手3名を対象として計300球のノック練習におけるゴロ処理を行わせ、野球の内野守備におけるゴロ処理の基本的な動作パターンとし

1) 仙台大学体育学部
〒969-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

2) 新島学園中学校高等学校
〒379-0116 群馬県安中市安中 3702

1. Sendai University Faculty of Sports Science

2. Niijima Gakuen Junior and Senior High School

て、『正面』の打球を『ロングバウンド』に合わせ、『ダブルハンド』で捕球し、『ワンステップ』で、『オーバースロー』で送球すること」と述べている。また、基本的な動作パターンを変化させる要因として、「守備者よりも『右側(三遊間)』の打球に対しては、『シングルハンド』を用いて捕球している」こと、『ハーフバウンド』で捕球した場合には、『複数ステップ』によって送球に移行している」ことを報告している。その中で、試合を想定することでノック練習でも試合と同様のパフォーマンスが発揮できると述べられているが、ノック練習において試合を想定することには限界があり、試合場面で実際に発揮されているパフォーマンスや動作はノック練習と異なる可能性がある。そこで本研究は、大学野球遊撃手の試合場面におけるゴロ処理の動作パターンについて、先行研究で示されたノック練習における動作パターンとの違いを明らかにすることで、実践現場および今後のゴロ処理の動作パターンに関する研究のための一資料を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 試合場面における動作パターンの分析

1) 対象試合と映像収集方法

S六大学野球リーグの2018年春季および秋季リーグ戦計67試合を対象とした。バックネット裏から二台のビデオカメラ(HDR-CX680, SONY社製)にて試合を撮影した。一台のカメラは投手と打席を中心として打球と送球が映り込むようにパンニングした。もう一台のカメラは、常時、内野全体を撮影できるように一台目よりも広めの画角に設定し撮影した。

2) 対象試技

遊撃手が走者無しの状況においてゴロを捕球し、一塁へ送球を行い、アウトとしたものを分析の対象試技とした。このうち、ほかの野手が先に打球に触れたもの(2試技)を除外した169試技を分析の対象とした¹⁾。

3) 分析

分析は、金堀ほか(2015)の方法を参考に、初めに、撮影した映像の観察を繰り返し、守備の動作を類型化することで5のカテゴリー、15のラベルを作成した。金堀ほか(2015)は5のカテゴリー、12のラベルを作成しているが、本研究では【ステップ】のカテゴリーに『ノーステップ』と『ランニングスロー』のラベルを追加した。また、【ハンドリング】のカテゴリーに『逆シングル』を追加した。これらのラベルについて、撮影した映像を観察しながら、各試技にラベリングを行った。ラベリングの作業は野球歴22年、指導歴3年の筆者と野球歴16年、指導歴6年の共同研究者によって行い意見が一致するまで映像を繰り返し観察して行うことでトライアングレーションし、データの妥当性および信頼性の担保を目指した(金堀ほか, 2012; 金堀ほか, 2015)。

全試技にラベリングを終了後、各カテゴリーにおけるラベルの表出数を算出した。

2. ノック練習における動作パターンについて

金堀ほか(2015)の「大学野球選手の内野ノック守備における動作パターン」の表と本文から情報を収集した。遊撃手のノック練習における守備動作から、5のカテゴリー、12のラベルを作成し表にまとめているが、本文中に【ハンドリング】について、『シングルハンド』のうち2球は『逆シングル』での捕球であったと述べられている。また、金堀ほか(2015)の報告の中には、『ノーステップ』と『ランニングスロー』のラベルはなかったため、これらのプレーはノック練習の捕球パターンとしては行われなかったものと判断した。

3. カテゴリーとラベルの表記について

本研究の本文中において、金堀ほか(2015)と同様に、「」で区切られた文節は、参考および引用文献の記述内容を抜粋したものであり、【】で括られた用語はカテゴリーを、『』で括られた用語はラベルを表している。

4. 統計処理

試合場面とノック練習での各カテゴリーにおけるラベルの表出割合に違いがあるかを検討するために χ^2 検定 (独立性検定) を行った。クロス表が 2×2 で自由度が 1 となるカテゴリーについては、イエーツ補正の χ^2 検定を行った。 χ^2 検定で有意差がみられたものについては、どの項目に有意差があるのかを明らかにするために残差分析を行った。残差分析では調整済み残差を算出した。統計処理の有意水準は 5% 未満および 1% 未満とした。

III. 結果

表 1 は遊撃手のゴロ処理における動作パターンの 5 のカテゴリーについて、本研究において分析を行い収集した試合場面と、金堀ほか (2015) のノック練習における各ラベルの表出数と割合を示したものである。各カテゴリーで試合場面とノック練習においてラベルの表出割合に差がみられるかを検討するために、カテゴリーごとに χ^2 検定を行った。 χ^2 検定で有意差がみられたカテゴリーについては、それぞれのカテゴリーのどのラベル

表 1 各カテゴリーにおけるラベルの表出数 (割合)

打球方向		
	試合場面	ノック練習
正面	79(46.7%)	158(52.7%)
左方向	54(32.0%)	67(22.3%)
右方向	36(21.3%)	75(25.0%)
捕球バウンド		
	試合場面	ノック練習
ロング	68(40.2%)	218(72.7%)
ショート	53(31.4%)	55(18.3%)
ハーフ	48(28.4%)	27(9.0%)
ハンドリング		
	試合場面	ノック練習
ダブル	93(55.0%)	209(69.7%)
シングル	66(39.1%)	89(29.7%)
逆シングル	10(5.9%)	2(0.7%)
ステップ		
	試合場面	ノック練習
ワンステップ	69(40.8%)	200(66.7%)
複数ステップ	78(46.2%)	100(33.3%)
ノーステップ	5(3.0%)	0(0%)
ランニングスロー	17(10.1%)	0(0%)
スローイング		
	試合場面	ノック練習
オーバー	143(84.6%)	256(85.3%)
サイド	26(15.4%)	44(14.7%)

表 2 各カテゴリーにおけるラベルの表出数の調整済み残差

打球方向		
	試合場面	ノック練習
正面	-0.91	0.91
左方向	2.29	-2.29
右方向	-1.23	1.23
捕球バウンド		
	試合場面	ノック練習
ロング	-6.91 **	6.91 **
ショート	3.22 **	-3.22 **
ハーフ	5.50 **	-5.50 **
**: $p < 0.01$		
ハンドリング		
	試合場面	ノック練習
ダブル	-3.18 **	3.18 **
シングル	2.08 *	-2.08 *
逆シングル	3.46 **	-3.46 **
*: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$		
ステップ		
	試合場面	ノック練習
ワンステップ	-4.00 **	4.00 **
複数ステップ	4.00 **	-4.00 **
**: $p < 0.01$		
スローイング		
	試合場面	ノック練習
オーバー	-0.21	0.21
サイド	0.21	-0.21

の表出割合に差があるかを特定するために、残差分析を行い調整済み残差を算出した(表2)。

【打球方向】は守備者からみて『正面』、『左方向(二遊間)』、『右方向(三遊間)』の3つに分けてラベリングを行った。その結果、試合場面における各ラベルの表出数は、『正面』が79球(46.7%)、『左方向(二遊間)』が54球(32.0%)、『右方向(三遊間)』が36球(21.3%)だった(表1)。試合場面とノック練習における各ラベルの表出割合を比較したところ、有意な差はみられなかった($\chi^2(2)=5.252, n. s.$)。

【捕球バウンド】は、『ロングバウンド』、『ショートバウンド』、『ハーフバウンド』の3つに分けてラベリングを行った²⁾。その結果、試合場面における各ラベルの表出数は、『ロングバウンド』が68球(40.2%)、『ショートバウンド』が53球(31.4%)、ハーフバウンドが48球(28.4%)だった(表1)。試合場面とノック練習における各ラベルの表出割合を比較したところ、有意な差がみられた($\chi^2(2)=52.059, p<0.01$)。そこで、残差分析を行ったところ、『ロングバウンド』はノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『ショートバウンド』、『ハーフバウンド』については試合場面で多くみられた($p<0.01$) (表2)。

【ハンドリング】は、『ダブルハンド』、『シングルハンド』、『逆シングル』の3つに分けてラベリングを行った。その結果、試合場面における各ラベルの表出数は、『ダブルハンド』が93球(55.0%)、『シングルハンド』が66球(39.1%)、『逆シングル』が10球(5.9%)だった(表1)。試合場面とノック練習における各ラベルの表出割合を比較したところ、有意な差がみられた($\chi^2(2)=18.126, p<0.01$)。そこで、残差分析を行ったところ、『ダブルハンド』はノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『シングルハンド』と『逆シングル』については試合場面で多くみられた($p<0.05, p<0.01$)。(表2)。

【ステップ】は『ワンステップ』、『複数ステップ』、『ノーステップ』、『ランニングスロー』の4つのラベルに分けてラベリングを行った。その結果、試合場面における各ラベルの表出数は、『ワンステップ』が69球(40.8%)、『複数ステップ』が

78球(46.2%)、『ノーステップ』が5球(3.0%)、『ランニングスロー』が17球(10.1%)だった。試合場面とノック練習における各ラベルの表出割合のうち、『ワンステップ』と『複数ステップ』について、 χ^2 検定を用いて比較したところ有意な差($\chi^2(1)=15.210, p<0.01$)がみられた。そこで、残差分析を行ったところ、『ワンステップ』がノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『複数ステップ』は試合場面で多くみられた($p<0.01$) (表2)、『ノーステップ』と『ランニングスロー』については、ノック練習の表出数が0であるため、統計処理は行わなかった。『ノーステップ』と『ランニングスロー』はノック練習では表出されなかったが、試合場面では行われた動作パターンである。

【スローイング】は『オーバースロー』と『サイドスロー』の2つに分けてラベリングを行った。その結果、試合場面における各ラベルの表出数は、『オーバースロー』が143球(84.6%)、『サイドスロー』が26球(15.4%)だった(表1)。試合場面とノック練習における各ラベルの表出割合を比較したところ、有意な差はみられなかった($\chi^2(1)=0.001, n. s.$)。

IV. 考察

試合場面とノック練習の比較において、【打球方向】、【スローイング】について有意な差はみられなかった。【打球方向】について、試合場面では、ノック練習と同様に『正面』の打球の割合が最も多く、試合場面とノック練習で大きな違いはなかった。【スローイング】について、『オーバースロー』と『サイドスロー』の割合は、金堀ほか(2015)の示すものとほぼ同じであった。内野手は状況によって投げ方を使い分ける必要がある(仲沢, 2006; 富田, 2000)、ショートから一塁への送球では比較的距離が遠いため、オーバースローが多くなったと考えられるが、これは金堀ほか(2015)の報告に沿うものであるといえる。

試合場面とノック練習の比較において、【捕球バウンド】、【ハンドリング】、【ステップ】については有意な差がみられた。

【捕球バウンド】については、「捕りやすいバウンドに合わせて打球を捕球する」(屋舗, 2006)ことが重要であるといわれる。久慈(2016)は、「バウンドする直前(『ロングバウンド』)というのはとても捕りやすくタイミングが少し遅れたとしても、バウンドした直後(『ショートバウンド』)であれば、ボールを押さえることができる」³⁾と述べている。このほかにも『ショートバウンド』や『ロングバウンド』を捕球バウンドとして推奨しているものが多い(仲沢, 2004; 高代, 2017)。ノック練習と試合場面を比較すると、試合場面では、『ハーフバウンド』での処理が多かった。試合場面では、ノック練習と比較して打球の強さや回転など打球の性質が異なり、捕球しやすいとされる『ロングバウンド』や『ショートバウンド』で捕球できるように移動し捕球地点を調節する、いわゆる「バウンドを合わせる」ことがノック練習より難しいことが『ハーフバウンド』での処理が多くなった一つの要因であると推察される。また、試合場面では打者走者が一塁へ到達するよりも早く、ゴロ処理を行ったうえで一塁へボールを到達させなければならず時間的な制約があるため、打球が弱い場合や打者走者が俊足の場合などはバウンドを合わせ正確に捕球することを優先させることができず、早く打球を処理するために前に出た結果、ハーフバウンドにならざるを得ない場面があることも影響していると推察される。

【ハンドリング】については、右手はグラブに添え、両手(『ダブルハンド』)で捕球することがゴロ処理の基本といわれる(伊藤, 2007; 関口, 2018; 野球指導書編集委員会, 2008)。試合場面においてノック練習と比較すると、基本とされる両手(『ダブルハンド』)での捕球は少なく、『シングルハンド』および『逆シングル』が多かった。高代(2017)は「ショートならば、三遊間を逆シングルで、もしくは、二遊間の打球をシングルで処理したほうがミスが少なくスムーズにスローイングに移ることのできる打球がある」と述べており、試合場面においては、アウトを取るための時間的な制約がある中で、スローイングへの移行を考慮し、『シングルハンド』や『逆シングル』での捕球

を行った場面が相当数あったと考えられる。右側の打球に対して、「逆シングルは慣れないうちはミスが増える」(阪長, 2018)と考えられており、「できるだけ正面に入るようにする」(野球指導書編集委員会, 2008)ことや「体を正面に入れ、きちんと股割して捕るのが基本」(井端, 2014)とされている。これに対して阪長(2018)は「右側(三遊間)のゴロに対しては、逆シングルのほうが、ゴロに対して移動する距離は短くなり、さらに捕球動作の流れのまま送球体勢に入ることができるため、打球に対して回り込むよりも逆シングルのほうが一塁に速くボールを届けられる」と述べており、井端(2014)は『逆シングル』について、「日本では手抜きと評価する人もいるが、状況次第では全く問題ない」と述べている。時間的な制約のある試合場面において『逆シングル』は必要なスキルであるといえる。また、試合場面では『逆シングル』でないと捕球できない、あるいは『逆シングル』の方が捕球が容易な、追いつけるかどうかギリギリの打球も散見されたことがノック練習と比較して『逆シングル』が多いという結果に影響を与えていると推察される。また、正面の高いバウンドやバウンドが合わないときは『シングルハンド』で捕り幅を使い捕球することもゴロ捕球のスキルとして推奨する指導書もあり(関口, 2018)、実際の試合場面では基本とされる『ダブルハンド』以外の【ハンドリング】を巧みに使う必要があるといえる。

【ステップ】については、試合場面ではノック練習と比較して『複数ステップ』が多く『ワンステップ』が少なかった。また、ノック練習では表出されなかった、『ノーステップ』と『ランニングスロー』が表出された。北村(2018)は「実戦ではすべての打球を正面で捕って、的確にステップを踏んで投げられるわけではありません。場合によってはミスを覚悟で勝負をかけなければならない局面があります。その際、アウトにするための選択肢を多く持っているプレーヤーこそ実戦向き」と述べており、試合場面では、『ノーステップ』や『ランニングスロー』という【ステップ】を用いることで送球の早さを優先するために、送球の正確性

が低下するリスクを取らざるを得ない場面が相当数あったと考えられる。一方で、試合場面では速い打球を処理する場合には、捕球から送球までに時間的な猶予がうまれるため、『複数ステップ』で送球を行うことができる。金堀ほか(2015)は『複数ステップ』よりも『ワンステップ』で送球へ移行することは守備者にとって難易度が高いため」研究対象者は「重点的に『ワンステップ』で送球へ移行することを心掛けて守備練習を行っていると考えられる」と述べている。試合場面においては、打球速度が速い場合や、打者走者の走速度が遅い場合には、ステップにかけることができる時間が比較的長い場合もあり、その際は、不安定な送球となる可能性が高くなる『ワンステップ』ではなく、難易度の低い『複数ステップ』を使用し、確実性を高めた送球を行っていると考えられる。北村(2018)は、「実戦で走者がかかわるなかでは、打球と走者のスピードに合わせて自分のプレーを選択する」「アウトにしようとする走者が塁に到達するまでが守備に許されたプレー時間。その範囲内でプレーを完結させる必要がある」と述べていることから、時間の制約が試合場面とノック練習の【ステップ】の違いに影響を与えると考えられる。

V. 今後の課題

本研究では、S六大学野球リーグ戦における遊撃手のゴロ処理と、首都大学野球一部リーグに所属するT大学硬式野球部の遊撃手3名のノック練習におけるゴロ処理について検討した先行研究のデータを比較した。競技レベルについて、S六大学野球リーグおよび首都大学野球一部リーグは過去5年以内に日本一のチームを輩出したレベルの高いリーグである。先行研究での対象者は首都大学野球一部リーグに所属するT大学硬式野球部の中でトップチームに属していた3名であり、本研究の分析対象者であるS六大学野球リーグ戦に出場している遊撃手と競技レベルについて大きな違いはないと考え研究を行った。しかし、野球の守備技能には動きの機敏さによる守備範囲の違い

などの個人差があり、比較対象の条件が同一ではないことによる影響が排除できない。試合場面とノック練習について同一の選手を分析対象者とすることでより正確な示唆を得ることが今後の課題である。

また、試合場面とノック練習におけるゴロ処理の動作パターンに違いを生じさせた要因のひとつとして、ノック練習におけるノッカーが打つ打球の質があげられる。【打球方向】については、試合場面とノック練習で有意な差がみられず、【打球方向】に関しては、ノック練習が試合に近いものであったと考えられるが、打球の質を決定する要因としては、【打球方向】以外にも、打球速度、バウンド数、バウンドの高さ、打球の回転というように複数のものが考えられる。本研究では、打球の質について試合場面とノック練習の違いを詳細に検討していないため、これらの要因を考慮した検討を行うことが今後の課題である。

VI. まとめ

本研究では、大学野球遊撃手の試合場面におけるゴロ処理の動作パターンについて、先行研究で示されたノック練習における動作パターンとの違いを明らかにすることで、実践現場および今後のゴロ処理の動作パターンに関する研究のための一資料を得ることを目的とした。

その結果、【捕球バウンド】($\chi^2(2)=52.059, p<0.01$)、【ハンドリング】($\chi^2(2)=18.126, p<0.01$)、【ステップ】($\chi^2(1)=15.210, p<0.01$)において有意な差がみられた。【捕球バウンド】については、『ロングバウンド』はノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『ショートバウンド』、『ハーフバウンド』については試合場面で多くみられた($p<0.01$)。【ハンドリング】については、『ダブルハンド』はノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『シングルハンド』、『逆シングル』については試合場面で多くみられた($p<0.05, p<0.01$)。【ステップ】については、『ワンステップ』がノック練習で多くみられ($p<0.01$)、『複数ステップ』が試合場面で多くみられた($p<0.01$)。『ノーステップ』、『ランニングスロー』につ

いてはノック練習では表出されておらず、試合場面では表出された。

ノック練習と試合場面では打球の質に違いがあることや、試合場面では時間的な制約があることがゴロ処理の動作パターンの違いに影響を与えていると推察された。

注記

- 1) 金堀ほか (2015) の研究では、ノック練習においてゴロを処理しアウトにした試技を対象としているわけではなく、捕球から送球までミスが生じなかった試技を対象としており、時間的制約については考慮されていない。本研究において、ノック練習と試合場面におけるゴロ処理の動作パターンの違いを明らかにするうえでより実践的な示唆を得るために、アウトをとるための時間的制約がある試合において、ショートゴロの処理を行いアウトにした試技を対象とした。
- 2) 【捕球バウンド】は金堀ほか (2015) と同様に、守備者が捕球する直前のバウンドにおいて、バウンドの上がり際で捕球したものを『ショートバウンド』、バウンドの最高到達点から下降して次のバウンドをする直前までに捕球したものを『ロングバウンド』、ショートバウンドと最高到達点との間で捕球したものを『ハーフバウンド』と定義した。
- 3) () 内は筆者が追記した。

文献

- 井端弘和 (2014) 守備の力. 光文社：東京, pp. 114-115, p. 190.
- 伊藤栄治 (2007) DVD でよくわかる！野球. 西東社：東京, pp. 112-137.
- 金堀哲也・川村卓・松尾知之・朝岡正雄・山田幸雄・會田宏 (2012) 我が国の指導書からみた野球の打撃指導における指導者の着眼点 - 動作局面における指導対象部位に着目して. コーチング学研究, 25(2), 149-156.
- 金堀哲也・川村卓・岡本嘉一・小倉圭 (2015) 大学

野球選手の内野ノック守備における動作パターン. コーチング学研究, 29(1), 23-29.

- 北村祥治 (2018) ベースボールマガジン社 (編) Baseball Clinic 2018年9月号 特集 続々プロ選手誕生！トヨタ自動車に学ぶ内野守備上達の法則. ベースボールマガジン社：東京, pp. 3-7.
- 久慈照嘉 (2016) 野球守備の教科書. ベースボールマガジン社：東京, pp. 104-105.
- 仲沢伸一 (2004) 上達する！野球. ナツメ社：東京, p. 171.
- 仲沢伸一 (2006) 基礎からマスター野球. ナツメ社：東京, pp. 106-117.
- 二宮清純・近藤隆夫 (2000) 確実にワンランクアップする！野球が突然、うまくなる. 成美堂出版：東京, pp. 54-55.
- 阪長友仁 (2018) 高校球児に伝えたい！ラテンアメリカ式メジャー直結練習法. 東邦出版：東京, p. 63.
- 関口勝己 (2012) 清水隆一 (監) 野球ステップアップシリーズ守備編 I 内野手. ベースボールマガジン社：東京, pp. 12-23, pp. 38-39, pp. 110-111.
- 高代延博 (2017) 高校球児に伝えたい！プロでも間違えう守備・走塁の基本 新装版. 東邦出版：東京, p. 19, p. 40.
- 富田勝 (2000) 試合に勝つ野球. 成美堂出版：東京, pp. 142-168.
- 野球指導書編集委員会 (2008) 野球の教科書 第2版. データハウス：東京, p. 32.
- 屋舗要 (2006) 選手を伸ばす！野球コーチング. ナツメ社：東京, p. 117.
- 谷沢健一 (2000) 野球入門. 岩崎書店：東京, p. 62.

(平成31年4月1日受付)
(令和元年9月12日受理)